

「描いて」被災地を応援

絵で被災地に元気を——。発生からまもなく5年を迎える東日本大震災の被災地・宮城県気仙沼市で、さいたま市のアトリエ教室が絵のワークショップ（WS）を開いた。元手は、さいたま市などで開いた教室の収益。「少しでも被災地のことを意識してもらえたら」。主宰者の思いに、共感の輪が広がり始めている。

先月10日、さいたま市南区であった「ベビーアーティストクラブ」。未就学の子どもとママら親子9組が参加した。この日のテーマは「バレンタイン」。約60平方分の部屋一面に敷かれたシートの上で、子どもの手や足を型にして、四つ切りの画用紙に絵の具を使って思い思いの「愛」を描いた。

開いたのは、同市を中心に子ども向けのアトリエ教室を主宰する「ひびくも」。代表の戸口朱美さん（54）は「家だと汚れるのが

以前、デザインの仕事をしていた時の同僚が気仙沼に住んでいた。5年前のあの日。津波が原因で気仙沼

気になって、絵の具を使って思い切って遊べない。こういう場所だと赤ちゃんでも楽しめる」と話す。

ベビーアーティストクラブは丸2年。月に3回程度、さいたま市内のほか、東京・表参道でも開く。

戸口さんらがこうした教室を開催するのは、宮城県気仙沼市で開くWSを続けるためだ。

「まだ復興の途上」共感広がる

港が火に覆われる映像をみて、「何かできないか」との思いにかられた。絵の教室の収益を元に、気仙沼でWSを開くことを考えた。

初めて気仙沼でWSを開いたのは2014年秋。

「気仙沼サンマフェスティバル」で、長さ20センチほどの生地に魚やハート、人の笑顔。子どもたちに自由に描いてもらった。大きな人だかりの中には大人の姿も。2日間で埋まった生地は会場に飾られた。

戸口さんは「知らない者同士が集まって作り上げる。少しでも楽しいと思ってもらえたら、それで十分」。昨年も同フェスティバルに参加し、温かく迎えられたという。

戸口さんらの取り組みを知って、さいたま市の教室に参加する親子もいる。1歳の息子を連れた、さいたま市浦和区の女性（28）は3度目の参加。「支援と言っても何かできるわけではない。クラブに参加すれば、支援につながっていると感じられる」と話す。

戸口さんは言う。「気仙沼の沿岸地はまだ更地の状態。復興の途上であることも伝えていきたい」

（有近隆史）



●乳幼児を対象に絵のワークショップを開いている戸口朱美さん。さいたま市南区。昨年10月、「気仙沼サンマフェスティバル」で行ったワークショップ。宮城県気仙沼市、戸口さん提供